

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【ボランティアを対象とした実践的研修】

受託団体名 駒ヶ根市

1 事業の趣旨・目的

(1) 事業の背景（課題）

多種多様な国籍や文化背景を持ち、日本語レベルも異なる学習者に日本語を教えるボランティアは、日本語教師のような知識や十分な経験がないため、日本語指導や教室運営で戸惑うケースが多く、学習者の効果的な日本語教育がボランティア日本語教室で実現できていない。

(2) 事業の目的

母語を日本語としない方の生活会話能力向上が、ボランティア日本語教室で効果的に実現されるように、日本語ボランティアの指導力・教室運営能力を強化する。

具体的には、日本語ボランティアの3つの力「①相手のニーズを受け取る力、②伝える力、③外国語として日本語を分析する力」を強化する。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	開催場所	出席者	議題	会議の概要
7月1日 10:00 ～12:00	駒ヶ根市役所 本庁舎2階 企画財政課	春原 直美 松岡 純子 関井 朱美 事務局（林）	○第1回事前運営委員会 ・本講座の進め方 （事業企画の確認・調整、 運営委員の検討）	左記議題 のとおり
7月17日 10:30 ～11:30	駒ヶ根市役所 本庁舎2階 企画財政課	春原 直美 松岡 純子 関井 朱美 事務局（林）	○第2回事前運営委員会 ・講座内容 （回数、時間、開催日の調整） ・講師選定	左記議題 のとおり
8月7日 11:00 ～12:00	駒ヶ根市役所 本庁舎2階 企画財政課	春原 直美 松岡 純子 関井 朱美 事務局（林）	○第3回事前運営委員会 ・講座内容の再調整 ・受講者募集 ・第1回運営委員会の進め方	左記議題 のとおり

8月26日 14:00 ～16:30	駒ヶ根市役所 本庁舎1階 第2会議室	松岡 純子 関井 朱美 妻鹿ふみ子 松澤 哉子 高坂 保 事務局3名 (原、中村、林)	◎第1回運営委員会 ・運営委員長選出 ・事業内容検討	【別紙1 議事録参照】
10月17日 15:30 ～16:30	駒ヶ根市福祉 センター3階 会議室	春原 直美 松岡 純子 関井 朱美 妻鹿ふみ子 松澤 哉子 高坂 保 事務局(林)	◎第2回運営委員会 ・事業経過報告 (第1～4回講座) ・今後の事業方針	【別紙1 議事録参照】
1月30日 15:40 ～16:40	駒ヶ根市福祉 センター3階 会議室	春原 直美 松岡 純子 関井 朱美 妻鹿ふみ子 松澤 哉子 高坂 保 事務局(林)	◎第3回運営委員会 ・事業経過報告 (第5～11回講座) ・今後の事業方針	【別紙1 議事録参照】
2月26日 15:00 ～17:30	駒ヶ根市役所 本庁舎3階 第2委員会室	春原 直美 松岡 純子 関井 朱美 妻鹿ふみ子 松澤 哉子 高坂 保 事務局3名 (原、中村、林)	◎第4回運営委員会 ・事業経過報告 (第12～14回講座) ・事業のふりかえり ・事業の総括(成果と課題) ・今後の展望	【別紙1 議事録参照】

【写真】



3 研修講座の内容について

- (1) 研修講座名
(事業名) ボランティア日本語指導者の実践的研修事業
(講座名) 日本語ボランティアのための基礎講座
- (2) 研修の目標
日本語教育ボランティアの指導力・教室運営能力強化
具体的には、日本語ボランティアの3つの力「①相手のニーズを受け取る力、
②伝える力、③外国語として日本語を分析する力」の強化
- (3) 受講者の総数 20名 (公開講座の一般参加5名除く)
＜内訳＞ ①性別 男性7名、女性13名
②地域別 市内13名、市外7名
- (4) 開催時間数(回数) 42時間 (14回) (講義のみ)
- (5) 参加対象者の要件
次の両方を満たす方
①日本語学習ボランティアの経験年数が原則2年以上又は意欲のある方
②市内にお住まいの方又は市内で日本語学習に関わる予定・意思のある方
- (6) 受講者の募集方法
・募集チラシの配布、掲示 【別紙2 募集チラシ参照】
(市及び近隣市町村関係機関、日本語教室、商業施設等へ配布し掲示依頼)
・駒ヶ根市ウェブサイトへの掲載
・プレスリリース
(結果、8月13日付「中日新聞(16面)」、「長野日報(3面)」等に掲載)
※公開講座とした第5・6回講座は、上記の募集方法に加えて、
市内及び周辺3町村へ有線放送で広報
- (7) 研修会場
ア 講義 駒ヶ根市福祉センター 3階 会議室
イ 実習 駒ヶ根市福祉センター 3階 会議室
※実習は、駒ヶ根市と地球人ネットワーク in こまがねが
実施する日本語教室内で行った。
- (8) 使用した教材・リソース
本事業オリジナルプリント教材 【別紙3 講座資料参照】

(9) 講座内容

ア 講義

日時	講座名／学習内容 【別紙4 講座概要参照】	講師* ¹ (講師補助)	受講者数* ² (一般参加)
8月29日 13:30～15:30	開会式、オリエンテーション 異文化コミュニケーション	事務局 松岡 純子、林 ま どか	12名
9月12日 13:30～16:30	日本語学習を支えるボランティアと教室運営 外国人相談の現場から	春原 直美 高木 美喜代	11名
9月26日 13:30～16:30	日本語1 日本語概論 (品詞のグループ分けなど)	関井 朱美 (松岡 純子)	12名
10月3日 13:30～16:30	日本語2 日本語文法の基礎知識	関井 朱美 (松岡 純子)	12名
10月17日 13:30～15:30	はじめての日本語学習者の受け入れ方、ボ ランティアの役割	妻鹿 ふみ子 (松岡 純子)	12名 (3名)
10月31日 13:30～16:30	地域の日本語教室の現状と今後	河北 祐子	18名 (2名)
11月14日 10:00～12:00 13:00～15:00	上田市日本語ボランティア入門講座聴講 みんなの日本語広場たろうやま(上田市内 の日本語教室)視察	河北 祐子、山辺 真理子	7名
11月21日 13:30～16:30	日本語3 文字指導で気をつけること	関井 朱美 (松岡 純子)	11名
12月5日 13:30～18:00	日本語4 動詞の形を見分ける	関井 朱美 (松岡 純子)	12名
12月19日 13:30～16:30	日本語5 学習項目の説明方法、例文を作 って考えてみよう	関井 朱美 (松岡 純子)	13名
1月16日 13:30～17:00	日本語6 学習項目の練習方法	関井 朱美、松岡 純子	9名
1月30日 13:30～15:30	日本語7 学習項目の練習方法を考えてみ よう1	関井 朱美、松岡 純子	13名
2月6日 13:30～16:30	日本語8 学習項目の練習方法を考えてみ よう2	関井 朱美、松岡 純子	14名
2月13日 13:30～16:30	駒ヶ根市の外国人の状況 浜松国際交流協会の取り組み まとめ、閉会式	事務局 堀 永乃 春原 直美、松岡 純子、関井 朱美	12名

*1 講師の肩書き

氏名	所属・役職
松岡 純子	日本語教師
林 まどか	開発教育ファシリテーター
春原 直美	長野県日本語ネットワーク代表
高木 美喜代	駒ヶ根市ポルトガル語通訳員
関井 朱美	日本語教師
妻鹿 ふみ子	京都光華大学 人間関係学部 社会福祉学科 教授
河北 祐子	東京外国語大学 多文化コミュニティー教育支援室 学習支援専門員
山辺 真理子	立教大学兼任講師
堀 永乃	財団法人浜松国際交流協会 主任 日本語コーディネーター

*2 受講者の平均出席率 60.0% (市内受講者 64.8%、市外受講者 51.0%)

イ 実習

	日本語教室開催日		参加人数	
	月	日	受講者累計*3	学習者累計
火曜日 (13:00~15:00) ・全6日 ・受講者累計12名 ・学習者累計10名	9月	1日	1名	1名
	10月	なし		
	11月	なし		
	12月	1、8日	4名	3名
	1月	19、26日	3名	4名
	2月	9日	4名	2名
水曜日 (19:00~20:30) ・全17日 ・受講者累計113名 ・学習者累計81名	9月	2日	5名	3名
	10月	7、14、21、28日	25名	17名
	11月	4、11、18、25日	29名	14名
	12月	2、9、16日	22名	11名
	1月	13、20、27日	19名	12名
	2月	3、10日	13名	24名
土曜日 (10:00~11:30) ・全16日 ・受講者累計83名 ・学習者累計69名	9月	5日	7名	5名
	10月	3、10、17、24、31日	29名	23名
	11月	14、21、28日	14名	7名
	12月	5、12、19日	16名	10名
	1月	16、23、30日	12名	15名
	2月	6、13日	5名	9名
	合計		208名	160名

*3 受講者は日本語ボランティアとして、日本語教室開催日3回中1回を基本に、任意の開催日に参加

(10) 講座の評価

① 受講者に対するアンケート

＜講義の各回に係るアンケート結果＞

全 14 回、受講者にアンケート調査を行った。結果は【別紙 4 講座概要参照】

＜本研修全体に係るアンケート結果＞

□受講者の意見、感想

～講座全体について～

- ・ 日本語教授において、実務面に力を入れた講座であり、参考になった。
- ・ 期間が長く感じた。内容で前期・後期と分けてもよかったのではないか。
- ・ 最近の外国人のための日本語教育事情がわかりとても良かった。
- ・ これまで知らなかった日本語を教えるための基本を知ったり、みんなで考えたり、ボランティア日本語教室のあり方を学べた。
- ・ 他のボランティア教室の様子を見聞きできて、いろいろな教え方があるのが参考になった。
- ・ 講座で他の地域の日本語教室を視察したことが、自分たちの教室を見直す際の参考になった。これ以外の日本語教室も視察してみたかった。
- ・ 出席が 6 回だけになってしまい、得られた成果は不本意なものだったが、講座内容そのものは有意義だった。
- ・ 都合で欠席する回数が多く、単発的な受講になってしまい、単に消化しただけとなってしまっていて残念だった。
- ・ 初めてボランティア活動について学んだが、ボランティアとして学習者の方とどう関わっていけばよいか勉強になった。
- ・ 学習者の大変さを理解できた。
- ・ 教え方の基礎ができた。
- ・ 日本語のルールなどを学習者に理解してもらえるように説明するのは、難しいと感じた。

～講師について～

- ・ 講師が素晴らしかった。
- ・ 講師が細かくしっかりと準備されていて、受講者が「学びたい」という気持ちにさせてくれた。
- ・ 講師の熱意とエネルギーに敬意を表する。
- ・ 講師と事務局の連携が良かった。

□受講者の意識や行動の変化

- ・ 教材「みんなの日本語」の使い方が身近になった。
- ・ 教科書で教えることが大切と思っていたが、教科書がなくても「生活者としての日本語」は伝えることができる。
- ・ 学習者と信頼関係ができるおつきあいをしたいと思った。

- ・ 「どの人も不必要な人はいない」と考え方が変わった。
- ・ 学習者の意見や要望をしっかりと聞くことが大切だと再確認した。
- ・ 今までは「日本語を教えること」「言葉を教えること」が第一だと考えてたが、外国人に対しては文化の違いも一つの教育なので、言葉を教えながら文化の違いも教えていきたいと思う。
- ・ どんな小さな事でも、学習者の日々の生活に役立つのではないかと考えるようになった。
- ・ 何もわからないところから少しでも日本語や日本に関することがわかってもらえるように、教室以外の所でも学習者と積極的に関わっていこうと思う。
- ・ 外国人のためにもっと力を貸してあたいたいと考えるようになった。
- ・ 目立った変化はない。
- ・ 私自身がマンネリ化していた教室活動が、講座を受けることで、ふりかえりや反省ができ、前向きに考えるきっかけとなった。
- ・ 外国人と話しをする時、相手がわかるようにやさしい言葉を使うようになった。また、相手が本当に何を言いたいかを理解するように努めるようになった。
- ・ 3年前の講座資料、「みんなの日本語 1」、その他の多くの資料の復習を始めた。
- ・ 外国で暮らす事の心細さを理解し、普段の生活でも外国の方に笑顔で接する様に心掛けたいと思う。
- ・ 学習者の方と話す時は、目線を合わせる、ジェスチャーを使う、声の大きさ、速さ、などに気を付けて、理解してもらえるよう努めたいと思う。
- ・ 学習者からの質問に答えられなかったらどうしよう…という不安はなくなった。わかる方に聞く、また後日調べて答える。そういった方法を教わり、肩の荷がおりた感じで、楽しく日本語教室活動に参加できるようになった。
- ・ 何気なく使っている言葉でも意外と使い方が難しいものだと感じた。
- ・ 実際に日本語を教えるということは大変難しい事であると実感した。
- ・ 「問題意識をもって事にあたるべし」と改めて思った。
- ・ 人の話を傾聴すること。

□受講者が今後取り組みたいこと

- ・ 相手（学習者）から受け入れられるかどうか不安はあるが、相手のニーズも聞きながら、楽しくお付き合いができればよい。
- ・ ボランティア活動の幅をさらに広げたい。
- ・ ボランティアで日本語教育を行なっていくことにより実践的な力をつけていきたい。また、私自身が日本語教育能力検定試験を受けようと思う。
- ・ これからも、いろいろな事を学んでいきたい。
- ・ 通信大学で日本語を勉強する。
- ・ ボランティアとして日本語教室活動をする上で、学習者がどこまで勉強したいのかをまず聞いてから、お互いが満足できる内容にしていきたい。
- ・ 既存の教材（みんなの日本語等）で学ぶことも大事ですが、当面の学習者は

ある程度の日本語のレベルはあるので、学習者の必要とする場面に合わせた教材を用いた教室にしたいと思う。

- ・ 教室が、外国の方と地域の方との架け橋となるようなことを考えていきたい。
- ・ 学習者のニーズにあう、日本語学習も考えていきたい。
- ・ 日本語教室を、学習者とボランティアが同じ立場に立って、お互いに学びあう場にしたい。
- ・ どのような学習者に関わることになっても、適切に対応できるようにしたい。
- ・ ボランティアであっても、常に勉強して知識を広げていきたい。
- ・ 学習者の方と互いに信頼関係を持ち、楽しく共に学んでいきたい。
- ・ 学習者に「また来たい」と思ってもらえるよう、勉強だけではなく信頼関係を築いていきたい。
- ・ 学習者の目線にたった工夫をしたい。

② 実施主体からの研修内容結果評価

＜評価できる点＞

□研修について

- ・ 毎回、受講者が研修をととても楽しみにしていたのが印象的。
- ・ 教材や講座など、研修内容は全て講師の「手作り」であり、受講者以上に、講師が努力された講座であった。
- ・ 著名な講師による講義や他団体の視察などは、この研修がないと実現が困難であったため、実施して良かった。
- ・ 先進的な取り組みをされる方々を講師として招いた講義もあったが、講師が自身の取り組みを「ソフト」に話してくださったので、受講者の反発や、「あの地域だからできるのであり、駒ヶ根ではできない」という考えにはつながらず、受講者自信の取り組みへの活力やヒントになったため良かった。
- ・ 実習の場であった日本語教室では「～でなければならない」というステレオタイプの雰囲気（例…日本語教室は正しい日本語をきちんと教える場）が若干懸念されたが、講座では「べき論」が少なく良かった。
- ・ 講座のうち日本語に係る部分が文法中心になってしまったという反省もあるが、日本語教室ではボランティアの日本語知識も必要であり決して無駄にはならないため、知識を与えることができて良かったのではないかな。

□研修の発展性

- ・ この研修を通じて、受講者にたくさんの視点を与えることができた。事実、受講者自身から、日頃の日本語ボランティア活動に対する前向きな発言がみられるようになった。
- ・ 日本語だけに執着することなく、日本語を入口に、外国人に対する様々な取り組みに発展できることを示すことができた研修となった。
- ・ 日本語だけでなく、外国人の課題が次々と見えてくる研修であったので、今後の受講者の活動に生かしていくことができるのではないかな。

- ・ この研修を評価する受講者が多く、次年度もこのような研修を発展させて実施できたら良い。

＜反省点＞

- ・ 研修内容が高度だったため、受講者によっては大変な研修だったかもしれない。
- ・ 研修内容が良かった分、もう少し多くの方に受講いただきたかった。（ただし、20名は研修をする側としては丁度良い人数ではあった。）
- ・ 実習の場であった日本語教室にある「～でなければならない」という雰囲気を、研修を通じて完全に取り払うことができなかった。
- ・ 講座のうち日本語に係る部分が文法中心になってしまったかもしれない。「日本語教師が教える日本語」ではなく、「日本語ボランティアが手伝う日本語」という視点で講座を組み立てたら、結果的に受講者の考えが少し変わったかもしれない。
- ・ 受講者が、受講後、自発的に取り組みをできるレベルまで能力を引き上げることができたか疑問。

③ 実施主体からの外国人支援体制等今後の計画

- ・ 当市は外国人の状況やニーズを把握しきれていないため、まずはこの調査を行う必要がある。
- ・ この調査により浮かび上がってくる課題を解決するための施策を、「多文化共生事業」という特別な括りで実施するのではなく（初期段階では必要であるが）、将来的には全ての事業に多文化共生の視点を組み込んで事業を実施できるよう、指針を策定し、外国人支援体制の足固めをしたい。
- ・ また、外国人は被支援者ではなく、地域の重要な一員であり人材であるため、外国人の持つ知識や能力やエネルギーを地域の課題解決や活性に生かす仕組みづくりも急がれる。

（１１） 事業の成果

① 他事業との連携

- ・ 実習など、地域の日本語教室と連携して事業を実施したことにより、日本語教室の活動にもプラスの影響があった。
- ・ 上田市の講座聴講、上田市内の教室視察、財団法人浜松国際交流協会の取り組み紹介など、受講者に対して他事業を紹介し比較いただくことで、受講者の普段の取り組みの課題が明確になった。
- ・ 普段、日本語教室間やボランティア団体間の壁を乗り越えて連携することは容易なことではないが、この研修のように、市などの中立的な機関がコーディネートすることで、連携が実現できた。

② 研修後の人材活用

- ・ これまで、市内の日本語ボランティア活動と関わりがなかった受講者が、研修

後半から活動を始められた。

- ・ 日本語教育やその他多文化共生の取り組み、外国人の課題などを、地域で語っていただくとともに、仲間を増やしていただくことが必要。
- ・ 研修内容だけでなく、受講者個々の社会人としての能力や経験が重要なリソースであるため、これを地域の日本語教育事業に生かしていきたい。

(12) 今後の課題

- ・ 外国人は地域にとって「お客様」ではなく「パートナー」である。この大切なパートナーとのコミュニケーションのための日本語や、パートナーの生活の不便が解消されるための日本語を「教える」のではなく、同じ生活者として同等の立場で「応援し共に学ぶ」のが地域のボランティア日本語教室のあるべき姿である。地域の日本語教室には、「外国人に日本語を教える」という「上から目線」と、「日本語教室は日本語を教えるところ」というステレオタイプの考え方が依然見受けられるため、これを変えていくことが今後の課題。
- ・ また、同じ生活者としての身近な外国人に対して、地域住民が応援できることはたくさんあるが、言葉のギャップや漠然とした不安感から、両者の間に大きな壁があることは事実である。この壁を打ち破る「媒体」となりうるのが、日本語ボランティアや日本語を習得された外国人であり、この皆さんに一人でも多くの地域住民や外国人を「輪」に巻き込んでいただくよう啓発すると同時に、巻き込みやすい「場」や「環境」を作っていくことが今後の課題。
- ・ 地域の日本語教室は、地域住民にとっても外国人にとっても大切な居場所である。「あの日本人」とか「あの外国人」ではなく、「〇〇さん」とか「△△さん」と固有名詞で呼び合える仲間をつくり、その輪を広げて地域のつながりを作っていくことが今後の課題。

以上